

図4 粘土板文書の書き方

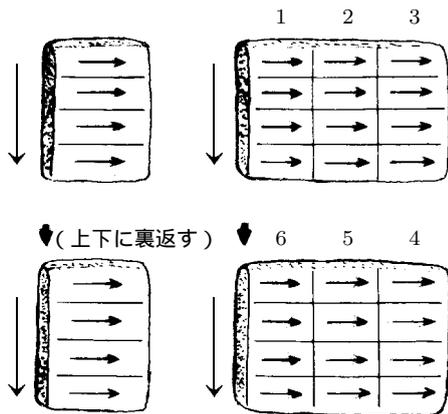


図5 シュメールの封筒とその中の手紙（広島大学文学部所蔵）



注)イラク, ドレヘム遺跡より出土。紀元前 20 世紀頃(ウル第 3 王朝時代)。封筒: 5.1 × 4.4 × 2.7 cm (裏), 中の手紙: 3.6 × 3.1 × 1.5 cm (表)。

きで、左から右へ書かれた。大きな粘土板に書く場合には、あらかじめ縦の欄を示す線を左側から順に引き、欄内に横線を引いて、その中に文を収めるのが普通である。粘土板の裏面を使用する場合には、粘土板を上下に裏返し、欄を逆に右側から左側へと作るが、その場合でも、文字配列は欄内では原則として左から右へ書かれた(図4)。ウルク文書、ジェムデット・ナスル文書、ファラ文書などの古拙文書では、文字の配列はでためめで、必ずしも左から右へとは読まれない場合がある。

楔形文字には句読点や分かち書きなどが無いが、頻繁に改行することで、同様の効果を上げることができる。文節ごとに頻繁に改行した場合、文節単位では横書きであるが、文単位で見ると結果的に縦書きのようになる。

書くことを、シュメール語では sar「植える」といった。葦の筆を生粘土板に押しつけて、楔形文字を植えるように書いたためである。筆は、シュメール語で gi-dub-ba「粘土板の葦」と呼ばれた。gi は「葦」、dub

表8 楔形文字の字形の差(前2350頃)

原形の絵文字	ラガシュ	シュルツバク	ニップール
anše「るば」 			
dam「妻」 			
nam「運命」 			
e「運河」 			
lú「人」 			

は「粘土板」、-a は属格接尾辞である。粘土板は日乾しのみま用いられることもあったが、普通には 600 程度の温度で焼成された。重要な粘土板は粘土製の「封筒」に入れて保存され、必要が生じた際に封筒を割って照合されたようである(図5)。

【字形】 紀元前 2350 年頃、すなわち初期王朝時代末期には、シュメール・アッカド地方の各都市においてすでに書記への楔形文字教育の伝統が確立されていたらしく、ラガシュ、ウンマ、ニップールその他の都市間で、楔形文字の字形の一部に明瞭な差異が認められるようになる(表8)。とくにシュルツバク(Surrupak、現名ファラ Fara)、キシシュ(Kiš)、アブー・サラビーフ(Abū Šalābīkh)の文字には、共通の古拙な特徴が認められる。これらの差異はバビロニア地方とアッシリア地方でさらに増幅され、対立的に発展をとげる。

【粘土板文書とその読み方】 図6に、図5の模写と翻字、訳を示す。

【参考文献】

Deimel, Anton (1922), *Die Inschriften von Fara* (Liste der archaischen Keilschriftzeichen, Leipzig)
 — (1947³), *Šumerisches Lexikon* (Lautwerte der Keilschriftzeichen in sumerischen, akkadischen und hethitischen Texte, Roma)
 Falkenstein, Adam (1936), *Archaische Texte aus Uruk* (Berlin/Leipzig)